

ヘラクレイトスにおける魂と宇宙世界の関係について

——断片六二の解釈を中心に——

柳 鶴 優 子

第一章

我々をとりまくあらゆる事物や生や死を理解するために、古代より多くの人々が様々な試みをしてきた。自然現象と自分自身とを同じ目で、統一的にとらえようとしたのが、初期の自然哲学者たちであった。死を肉体からの魂の離脱とみなすようになって以来、魂が生命の原理として定着するまでにはそれほど時間はいからなかっただろう。アリストテレスによって最初の哲学者とみなされている人々は、万物の根源を発見することにその生涯を費やした。万物の根源を何ととらえるかということは、とりもなおさず、自己と宇宙の問題にかかわってくる。それには大前提として、自己(魂)と宇宙との間には何らかの関連があるはずだという考え方が根底にある。

ヘラクレイトスの魂は宇宙世界の Logos と密接な関連をもつといわれている。断片一一五は、魂の Logos について語られたものである。それは宇宙の Logos と同じ性質をもつと考えられている。個人の魂と宇宙の機能がどのような関係にあるのか、ヘ

ラクレイトスはどのように魂と宇宙を考えたのであろうか。本論では宇宙論的(あるいは気象学的)な見地からこの問題にあたってゆきたいと思う。ヘラクレイトスの魂は、乾いているか、それとも湿気を帯びているかが重要なポイントとなる。それは彼の気象論ともかかわってくる問題である。ヘラクレイトスは、気象現象を火と海と大地との循環で説明している(Fr. 三二)。断片三六では、その火にあたる部分が、魂に置き換られている。個人の魂がどのように気象現象(自然現象)と関係してくるのだろうか。魂をより乾いたものにするには、宇宙の Logos を理解し知を獲得しなければならぬことは、周知のことである(Fr. 1, 2, 118)。しかし、完全なる宇宙世界から人間、万物を解釈したり、あるいは人間の在り様をもって宇宙の完全さを立証することはあっても、このような個人の知が宇宙世界におよぼすもの(果たして、そのようなものがあるかどうかも含めて)やその関係については、今まであまり議論がなされていないように思われる。宇宙の機構や機能が、その魂の乾きぐあいといかなる関連性をもっているか探求することが本論の目的である。

断片六二は、不死なるものと死すべきものが同じであると指摘している箇所である。理解の難しい断片ではあるが、まず最初に両者の関係を明確にすることによって、以降の手引きとしてゆきたい。この断片の解釈については全く異なる意見を述べている C. H. Kahn と T. M. Robinson の説を参考に進めて行く。

第二章

(I)

断片六二の意味するものは何なのか。その解釈については、様な見解がでると思われる。 *ἐπέω* 動詞が省略されていることや、指示代名詞 *ἐκεῖνον* が何を示すのか、いく通りにもとることができ、本来の意味が何なのかしっかりと把握するには難しいところである。ひとまず最初の二節については次のような訳をとると仮定して、先へ進みたいと思う。

「不死なるものたちが死すべきものたちであり、死すべきものたちが不死なるものたちである」

さて、これらがどういう意味内容をもっているのか。またこの後の三節目と四節目の主語がそれぞれ何を表すのか。それらが何をとるかによってこの断片は全く違った趣をもつことになる。Kahn は次の様に解している。⁽¹⁾「我々人間は、我々の死が実際に一種の新しい生であることにおいて、不死であり、彼ら神々は、彼らが死ぬからではなく、彼らの生が我々の死に由来することから、死すべきものである」。そして彼は、「死すべきものたちは、不死なる

ものたちの死を生き、不死なるものたちは、死すべきものたちの生において、死んでいる」と訳し、三節目と四節目の主語をそれぞれ「死すべきものたち」と「不死なるものたち」に、そして *ἐπέω* を「不死なるものたち」と「死すべき者たち」にとった。 *ἀθάνατος* は、単に「神々」をさすのではなく、この場合、生者として魂が正常に機能していない状態、つまり睡眠状態も含むと彼は考える (H. 二二)。生命のサイクルの中で、水化、土化しているもの、

新しい生となるもの他に、生きていながらも死者に触れている状態を含めてすべてを「不死なるものたち」とみなしている。すなわち、この断片で述べられているのは、特別な人間ではなく、万物についてであるということである。そしてまた、彼の解釈は一方の生と他方の死が同時に進行している様をのべており、生死のサイクルの中の一瞬をとらえているといえる。Robinson はこれに対して、これは戦死者の魂について表した断片であるととる。戦死した者の魂が守護神となる (H. 六三) ことと関連させて、その魂の様々な局面を説明したものとみなす。従って *ἀθάνατος* は、彼の場合「神々」を意味し、*ἐπέω* については、「一方が他方の死を生き、他方が一方の生を死ぬ」となる。「死んで不死の身となったが、かつてその魂は死すべきものであった」。今や不死の身であるが、その中にはかつて死すべきものであった死すべきものの要素が入っており、かつて死すべきものであったが、その中にはやがて不死の身となる不死の要素が入っていた。このように解すことによって、魂の可能性のようなものを Robinson は

この断片から読み取っている。

(II)

Adarar は一般に不死なるものとして、「神々」をさすと考えられている。本論では一般論をとり、*Adarar* を神的な実体と仮定し、論を進めて行く。さて神々を *Robinson* は戦死者の魂と考えた。戦死者の魂は、やはり死後守護神となるヘシオドスの黄金の族にたとえられる。彼らは *aiō* の中に隠れて、人々の悪事を見張る。彼らは *aiō* の中にいる *aiō* 的な存在といえる。しかし、ヘラクレイトスにおいては、「神々」と同格の「死すべきものたち」は、乾いた魂である。唯一の知に到達した者の乾いた魂もまた、戦死者の魂と同様に、死後急上昇し神々となる (Hfr. 93, 118)。それがどのような性格の「神々」なのか、このような問題も含めて、最初の二節からみていくことにする。

(一) *Adarar* *Dynol*

この箇所の意味するものは *Robinson* と同じであるが、上述したように、それらは、乾いた魂の持ち主を考える。乾いた魂故に、「今や不死なる身となったが、以前は死すべき人間であった」。

(二) *Dynol* *Adarar*

同様に、「以前死すべき身であったが、今や不死なる神である」。あるいは、(一)、(二)とも反対に、今乾いた魂をもつがゆえに、「現在死すべき人間であるが、死後には神となる」という意味を表すとも考えられる。

三節目・四節目の「死を生き、生を死ぬ」の解釈について、ま

ず初の二節から切りはなして考えてみると、「一方が他方の死を生きる」は、ごく一般的な自然のサイクルを述べているのではないかと予測がたつ。生きているものが、生きているものではないことによって、つまりそれを食べ、栄養とすることによって生命を維持していく。数えきれない程の死の上に我々の生が成り立っているということ、つまり一方が他方の死を生きているということであり、そしてその逆の立場が「他方が一方の生を死ぬ」ということになる。しかしながらそれでは、(一)や(二)の間に何の関連も生じてこない。乾いた魂と同一視される *Adarar* とは、神性としてどのような性格であるのか。人間と対立するものとしての「神」とは異なる。「それらの死を生き、それらの生を死ぬ」というかにはむしろ相関関係を表す断片が、この断片を立証するために必要になってくる。

断片一―四は次のように述べている。

「知をもって語ろうとするならば、人は万有のうちの共通のものにしっかりとしがみつけないければならない。ちょうどポリスが法に対するように、いな、それよりもはるかにもっと強力な仕方である。というのも、人間たちのあらゆる法は、一なる神の法によって養われている (*tephorau*) のだから。すなわち、神の法は、意欲すればどこまでも限界なしにその支配をのびし、万物にとつて充分であり、かつ十二分であるのだから」。

tephorau という扶養関係を表す言葉が使われている。がしか

し、神が養分を供給しているわけでもないし、それによって神の側になんらかの減少が生じることもない。なぜなら、「神の法は十二分である」のだから。つまり、一方の死によって他方の生が成立しているという関係ではない。KirkやKahnが述べているように、*teóborut* は比喩として使われていることになる。神の法は、「万有のうち共通のもの」で、Logosと同じものであり、宇宙秩序（コスモス）の組成要素である。ここでの「法」(*dylos*)「は、いわゆる「律法」ではなく、人間が守らねばならない「掟」であり、「道徳規範」である。人間の法は、神の法と比べて、共通性の点で格段に劣るが、規範という性格は同じである。従って、密接な関係がそこにあるはずだが、その接触は間接的なものということになる。ところで法は知の結集したものである。そして、K. R. S. が述べているように、善い法は火的魂をもった賢明な者の産物であるということができよう。この火的魂をもった者は、真なる叡知に達している者である。真なる叡知とは、宇宙の「Logos」を理解することである。そして、それはまた「神の法」でもある。すなわち、「神の法」である宇宙の「Logos」を理解する、真なる叡知に達した個人の乾いた魂によって「人間の法」はつくられ、それは「神の法」によって養われるのである。「神の法」と「人間の法」、そして「乾いた魂」の三者の関係がここに現れるわけである。「神の法」は「Logos」であり「共通なもの」であるから、それは *abduktor* である。従って、(一)、(二)を断片一四に合わせて解釈してみると、「神の法は乾いた魂であり、乾

いた魂は神の法である」ということになる。さて、乾いた魂は、死後に上昇して天体の輝きを構成すると Kahn は考えている⁽⁸⁾。ホメロスは魂を「息」(*psûchê*)とみなし、アナクシメネスは「空気」(*âthp*)とした⁽¹⁰⁾。ヘラクレイトスは魂を火的な *âthp* と考えた⁽¹⁰⁾。その火的程度が高ければ高いほど、それだけ上昇して、太陽や星々や永遠不滅の火に近付くのである。真なる叡知に達した者の乾いた魂は、死後、それを理解することによって「乾いた魂」となったその Logos の一部となるのである⁽¹¹⁾。それゆえ、(三)、(四)は、次のような意味をとる。

(三) *êdures tou êskhôn êduktor*

主語は *êduktor* で、*êskhôn* は *dyntoi* を必ずと考える。「不死なるものたちは、死すべきものたちの死を生きる」は、すなわち、「神の法は乾いた魂の死を生きる」ということになる。上述したように、乾いた魂は、死後において神の法、Logos の構成要素となる。新しい *âthp* は上空の火的要素と再結合し、天体の輝きを増す。それは、*abduktor* によって「生きること」であろう。そしてその「生」は、乾いた魂をもつ「死すべきもの」の「死」に由来する。

(四) *tou de êskhôn plou rebuêtes*

主語は *dyntoi* で、*êskhôn* は *abduktor* を必ずと考える。「死すべきものたちは、不死なるものたちの生を死ぬ」は、(三)と反対の状況をあらわす。乾いた魂をもつ「死すべきもの」の「死」は、天体の輝きを増し、神の法、Logos の「生」となる。

以上、断片六二の解釈からわかったことは、真なる知に到達した乾いた魂は、人間の法と神の法の両方に関与するということがある。すなわち、その魂は生きている時には人間の法にかかわり、死後には *aiōnōtē* となって神の法を構成するものの一部になる。

更に、ヘラクレイトスは次のようにも言っている。「一人の意志に従うこともまた法である」(fr. 三三)。「もしその人が最善の人であるならば、私にとつてその人は一人でも万人である」(fr. 四九)。ここで述べられている者は、乾いた魂の持ち主であろう。具体的には、唯一共通なる *logos* を理解し (fr. 一、二)、「あらゆるものに代えて一つを選び」(fr. 二九)、「万有に共通するものに信頼を置いて」(fr. 一一四) いて、「万物を、あらゆる仕方を通じて操るその知」(fr. 四一) を知っていて、更に、その「*logos*」がいかなるものとも隔絶している」(fr. 一〇八) こともわきままえている者である。そのような人物は、*logos* と同じである。断片四四では「人々は城壁を守るために、法を守るために戦わねばならない」といっている。従って、このような人間を守るためにも、人々は戦わねばならないのであり、彼らにはそうされるだけの価値があるということになる。

第三章

さて、乾いた魂は、死後に天体の構成要素の一部となるが、永久にその地位にいたるのではないだろう。⁽¹¹⁾ 断片一二、四九 a、九一にあるように、あらゆるものが変化をとげるとしたら、*aiōnōtē*

もまた下降して水となる。⁽¹²⁾ 構成要素の離脱という状況の中で、神の法すなわち *Logos* にどのような変化が生じるのだろうか。別の言い方をすれば、*Logos* の能力に *aiōnōtē* がどれだけ関与しているかということである。この章では *Logos* についてみてゆくことにする。⁽¹³⁾

「*logos*」は、人の「言葉」や「論説」を表す他に、宇宙的な意味で使われている。断片一ではそれは、「この通りのものとしてある」と述べられ、断片二では、「共通のもの」と語られている。「万物を治める」(fr. 七二)とも言及され、*Logos* が宇宙的原理であることを示している。そして断片三一では、それがどのような性格をもつ原理であるか表している。

「火の転化はまず海であり、海の転化は、半分が大地、半分は竜巻である、(大地は)海として溶けるが、それ(海)は、大地となる以前にあったのと同じ *logos* になる」(fr. 三二)。「同じ *logos*」とは、「同じ比率、同じ割合」を意味する。すなわち、宇宙の循環のバランスをとっているのがこの *Logos* であり、それはそのまま「神の法」(fr. 一一四)であって、それは絶対的なもので、絶対的な神に等しい (fr. 三二)。この機能はミクロコスモスとしての人間(魂)についても適応され、宇宙原理の *Logos* と連動させたかたちで、「深き *logos*」(fr. 四五)、「自己を増大させる *logos*」(fr. 一一五)と語られている。

宇宙の原理をあらわす重要な言葉としてほかに「*metra*」がある。「それは永久不滅の火として、今までにも在ったし、今も存

在しているし、またこれからも在るだろう、一定の分 (*μέτρα*)
燃え、一定の分 (*μέτρα*) 消滅しながら」(Fr. 三〇)。

断片三〇の *μέτρα* は、断片三一の *ἀγρὸς* と同じ意味をもつと
考える。燃焼と消滅の「割合」あるいは「比率」が「一定」であ
ることを表している。

今までみてきたのは、宇宙的な循環についてである。その循環
に加わるものとして、魂が *αἴθρῃ* 化し、そしてまたそれが水と
なるという循環がある。ここで疑問が生じてくるのは、まだ生き
ている段階で、真なる知への道を行んでいる魂の状態、つまり
「乾化」は、果たして他の火的要素から内へと取り込むことによ
るかどうかということである。もし外からの取り込みによって、
魂が乾くとすれば、その瞬間の宇宙的な火の総量は全く変わらな
い。しかしもし魂が自ら変質をとげているとしたら、火の総量は
わずかではあるが多くなるだろう。そして魂が死によって肉体
から離脱し、*αἴθρῃ* として急上昇する瞬間は、生前より多くの火
的要素が宇宙に放散されることになるだろう。知の獲得は、いか
なる養分も必要としないと考える。まず、「掘りおこす価値があ
り」(Fr. 二二)、「他のいかなるものとも隔絶している」(Fr.
一〇八) 知は、「この通りのものとして」「実地に出会って
いる」はずであり (Fr. 一)、「共通のものである」(Fr. 二) *Logos*
を理解することである。つまり、それは我々の前に提示されてい
るだけであり、我々の方から気づき、それへと至る道に歩みだし
てゆかねばならないのである。その過程を、例えば断片一一四で

「人間の法は神の法に養われている」とあるように、魂もまた何
らかの養分を得ているとは考えられない。そもそも前述したよう
に、「養われている」は、比喩的な表現である。従って、魂の
αἴθρῃ 化は、それだけで宇宙的な火の増加であると考える。

さて、以上の事は、魂の *αἴθρῃ* 化と水の火化が宇宙においては
同じ現象であると想定しての話である。反対に今度は、宇宙の
構成要素としての火という立場からみてみる。火↓海↓大地とい
う宇宙的循環においては、「海は大地となる以前にあったものと
同じ分量になる」(Fr. 三二) ということから、それら三要素の
総量は不変であると考ええる。海から火への量、つまり海が蒸発
(*evaporation*) して *αἴθρῃ* となるその量も、大地から海への量
が変わらなければ、一定である。しかしながら、魂が死後に *αἴθρῃ*
となる可能性はごくわずかである。宇宙における火的存在とい
う意味では、「火化」は、海からの場合は不変だが、魂からの場合は
変動があり、総量としては、一定ではないということになる。確
かに、宇宙的循環においては、火の総量に対する *αἴθρῃ* 化した魂の
割合はごく少ないものであろう。それ故、ヘラクレイトスは、断
片三二において「海は同じ分量になる」と強調しているのである。
しかしながら、断片六二の解釈で我々は、「神の法である *Logos*
が乾いた魂の死を生きる」と解することができた。ここに個人の
魂の宇宙原理に対する関与の可能性をみることはできないだろう
か。

乾いた魂の死によって *αἴθρῃ* の量が増えると、全体として、天

体を構成する *aithe* の量は増える。天体の *aithe* の量は常に一定であるとはいえない。そのような変化は、神の法・Logos の機能に影響を及ぼすことができるのだろうか。神の法は能力的には「十二分」であるから、量に変動があったとしても、機能的に支障をきたすとは考えられない。⁽¹⁵⁾ 真なる知を獲得しようとする個人の努力は、神の法の「十二分さ」の前に費やしてしまうとも考えられる。しかしそれでは、何故ヘラクレイトスは知の獲得を人々に思慮深く、情熱的に勧めているのか。また一方で、何故彼は、「この通りのものとしてあり」、「実地に出会っていて」、「共通のものである」Logos を理解できない大衆を非難するのだろうか。断片一二は次のように語っている。

「エペッス人の青年以上の者は皆、首をくくって死に、まだ成人に達していない若者たちにポリスをゆだねるがよい」

このようなあからさまな非難と、「私は私自身を発見した」という断片一〇一のような深遠な知についての言葉の両方を、我々は共に平行して考えるべきなのではないだろうか。真なる知に到達した乾いた魂が、死後に *aithe* となり、宇宙（コスモス）の構造上、機能上の一部となること、重要な意味を持つのではないだろうか。いやむしろもっと積極的に、魂が火的存在となる可能性をもっていることから考えて、宇宙の原理を分有するもの義務として、自分の魂を乾かすよう、知の獲得のために、つねに精進することが使命であるということ、それを彼は主張しているのではないだろうか。

第四章

魂は、火的存在からではなく、水から誕生する (fr. 三六)。火的存在となる可能性をもちながら、本来水的な部分をもっている。知の獲得とはこの水気をなくすことである。知への道のりが険しいだけではなく (fr. 一〇一、四五、二二、三五)、湿気を帯びること、つまり飲酒 (fr. 七七) や火的要素の消耗、つまり怒ること (fr. 八五) という *aithe* 化とは正反対の方向へと向かわせるような誘惑が、この世には充滿している。そのような衝動に駆られることなく、知への到達目指して、我々は精進しなければならぬ。何故なら、今まで見てきたように、魂の精進は、個人の問題ではなく、宇宙的な問題だからである。K. P. S. によると、宇宙的要素としての火は、水化することを、海を「養う」といい、その水が火化することを「火が自らを養っている」ということができる⁽¹⁷⁾と解している。そのような見方をとると、乾いた魂が *aithe* 化することは、「天体が自らを養っている」ということになる。

まとめとして、断片六二では、*addeuon* は *aithe* であり、*burned* は乾いた魂の持ち主であるとみなすことができた。そしてまた、「かのものたちの死を生き」は、乾いた魂が死んで *aithe* となり、天体としての量を増すことであると考えることもできた。Logos の機能によって宇宙世界（コスモス）のパランスはとられていくがゆえに、*aithe* は海を養うために水（雨）となつて下降する。すなわち、「死を生きる」ということは、魂が宇宙に

おける循環の一助を担っているといふことである。そしてこの場合、魂はあくまでも *aiōnē* となる乾いた魂でなければならぬ。Kahn によると、湿気のある大半の魂は、死後すぐには水とはならないが、*aiōnē* となりより低いより暗い大氣中を徘徊してから、肉体と同様に水となって下降する。それは、循環のサイクルの中にはもちろん入っているが、Logos の機能には何の影響も及ぼさない。断片六三にあるように、乾いた魂は、死後地上のものたち（生物と死者）を監視するために急上昇する。この時点で、死すべきものであった時の人格は失われる。つまり、*aiōnē* となってしまう魂には identity はない⁽¹⁹⁾。困難きわめる知への道をたどって乾いた魂を獲得した者は、死んで天体の一部となつて生きるのである。それがまた、「かのものたちの生を死ぬ」といふことになる。この乾いた魂の *aiōnē* 化は、常に必要である。断片三〇の *aiōnē* とよび、*aiōnē* は保たれつゝ、*aiōnē* の量が少なければ、それだけ燃焼と消化の規模が小さくなる。従つて *aiōnē* の量は常に充実してゐることが肝心である。そしてそれはひとえに個人の魂への精進にかかつてゐるといふことである。

註

- (1) Charles, H., Kahn, *The Art and Thought of Heraclitus*, An edition of the fragments with translation and commentary, Cambridge Univ. Press, 1983^s (1979) pp. 216-220.
 (2) T. M. Robinson, *Heraclitus Fragments*, A Text

and Translation with a Commentary, University of Toronto Press, 1987 pp. 124-125. Robinson は *aiōnē* だけになく、Hades にいつても、むしろ一般的に解釈の方をとる (fr. 98)。

- (3) ハミオニス『仕事と日』(松平千秋 訳) 岩波文庫一九八六年。黄金の族にいつては次のように述べられている。「彼らは地上の善き精霊となり、人間の守護神として」(鶴 *aiōnē*) に身を包み、地上をくまなく徘徊しつゝ、裁きと悪行とを監視し、人間に富を授ける。このような王権にも比すべき特権を与えられたわけじゃ」(123-125)。「ものみなを養う大地の上には、ゼウスの命を受けて、人間どもを見張る三万の神々がおられ、鶴 (*aiōnē*) に身を包み、地上をくまなく見まわつて、裁きの不逞の行為を監視しておんでゐる」(252-255)。

- (4) G. S. Kirk, *Heraclitus The Cosmic Fragments* Edited with an Introduction and Commentary, Cambridge Univ. Press, 1978 (1962) pp. 48-56.
 (5) Kahn, *op. cit.*, pp. 117-118.
 (6) G. S. Kirk, J. E. Raven and M. Schofield, *The Presocratic Philosophers*, Second Edition, Cambridge Univ. Press, 1987 p. 212 参照。
 (7) K. R. S, *ibid.*, p. 212.
 (8) Kahn, *op. cit.*, pp. 250-251.
 (9) マナクシメネス 断片二は次のとおり「空気がある私達の魂が、私達をしっかりと掌握してゐると同じように、氣息と空気が宇宙全体(自然万有)を包み囲んでゐる」訳は、廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』(講談社) 一九

八七年)に於て。

(10) K. R. S, *op. cit.*, p. 204.

(11) Robinson, *op. cit.*, p. 128. 不死なるものの *ἀθάνατος* は
ロキヌスの構造上、機能上の一属性である。よみなしてはる。

(12) (8) 参照。

(13) Kahn はあるゆゑものが生まれ変わるとしたら、生涯を
より良く生きることとそれ自体や勇敢な死といったものは、
変化のサイクルの中ではどのような意味をもつのだろうか
と問はつてはる。*op. cit.*, p. 252.

(14) クラウゼンブルクの Logos は $\lambda \omicron \gamma \omicron \varsigma$ W. K. C.
Guthrie, *A History of Greek Philosophy* 3 vols
1985 (1962), I The earlier Presocratics and the
Pythagoreans, 7 Heraclitus (a) The Logos pp. 419-
434 に於て詳しく分析がなしてある。

(15) Kirk, *op. cit.*, p. 318.

(16) Kirk, *ibid.*, p. 50.

(17) この断片に於ては *θυμὸς* が何を意味しているかで意
見がわかれる。*θυμὸς* を「欲情 (impulse, passion)」な
ど衝動一般を表す立場と、乾いた魂と同じ火的なものの「怒
り (anger)」をこゝる立場があり、Kirk や Kahn は後者
である。彼らはつぎのように解釈している。乾いた魂は理
性的であるが、「怒り」は非理性的で制御がきかない。そ
の分だけは罪が大きく、とりかえしのつかないような事態
になる。*Spans* の傾向が強いが、それは勇敢さや気高さに
似ているためであつて、人々はその衝動へひきこまれる
ことがしばしばである。魂を犠牲にしても目的を達すると
いう性格上、魂の火的消耗をまねくが、それは一種の自殺

行をせよ。

(18) K, R, S, *op. cit.*, p. 199.

(19) Kahn, *op. cit.*, pp. 256-259.

(20) Kahn, *ibid.*, pp. 245-254.